

教育目標		自ら考え、行動し、未来を創造できる生徒の育成		～感謝する心、確かな学力、健やかな心身を育てる～			
重点目標		①確かな学力の育成 ②豊かな心・健康な体の育成		③開かれた信頼される学校づくり			
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
基礎・基本の徹底と授業改善	・指導方法の工夫改善を図る。 ・補習や補充学習を充実する。	・「未来を切り拓く力の育成 ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～」を研究テーマとし、ICT機器を活用した学習指導の工夫を取り入れる。 ・目標を持って学習できるように、毎時間必ず「本時の目標」を提示する。 ・全学年（全教科）共通の「振り返りシート」を活用し、生徒の学びに対する自己調整能力を高める指導を行う。 ・各教科において、「話し合い活動」や「教え合い活動」の時間を積極的に設けて、対話的で深い学びに繋げる。 ・全校生徒による「数学教え合い学習」を実施し、学習に対する主体性を高める。 ・全教科において「シラバス」を配布し、見通しをもった学習指導を行う。 ・「授業参観weeks」で、全職員が見互い授業を行い、「生徒の学びの姿」を授業改善に繋げる。 ・校内研修会及び、研究授業を積極的に行う。 ・終礼学習ではタブレット課題の「ミライシード」やプリント課題に取り組み、繰り返し学習することで基礎学力の定着を図る。 ・コミュニケーション・トレーニングを実施し、主に「話す力」「聞く力」「書く力」を高める。 ・テスト前や長期休業中に、学習相談日を設定し、個に応じた指導を充実させる。	・生徒アンケートにおいて、「授業は分かりやすく楽しい」という項目で、肯定的評価は80%以上を目指す。 ・生徒アンケートにおいて、「先生は、教え方にいろいろ工夫している」の項目で、肯定的評価が90%以上を目指す。 ・ROSEタイム(生徒同士の数学教え合い学習)アンケートにおいて、「グループ学習は楽しい」の項目で、肯定的評価が80%以上を目指す。 ・生徒アンケートにおいて、「コミトレを通して書く・聞く・話す力がより身についたと思う」の項目で、肯定的評価が80%以上を目指す。	B	・「授業が分かりやすく楽しい」という項目では、生徒の肯定的な評価の割合は83.0%となり、目標数値を上回る結果となった。定期的に「学習に関するアンケート」を参考に、生徒が興味を持ち、楽しく学習ができるような手立てを考えることができた。 ・「先生は、教え方にいろいろ工夫している」の項目では、生徒の肯定的な評価の割合は89.2%となり、目標数値をやや下回った。 ・ROSEタイムアンケートの「グループ学習は楽しい」という項目では、生徒の肯定的な評価の割合は94.6%となり、目標数値を大きく上回る結果となった。生徒同士の教え合い学習は、安心して学習ができる居場所となっていると考えられる。 ・「コミュニケーション・トレーニングを通して、書く・聞く・話す力がより身についたと思う」の項目で、生徒の肯定的な評価の割合は76.5%となり、目標数値を下回る結果となった。 ・補習や補充学習の充実に関しては、終礼学習の時間を確保し、タブレットを活用したミライシードやドリルプリントに取り組むことで、繰り返し学習する習慣を身に付け基礎学力の定着を図った。また、テスト前や長期休業中には、全学年で学習相談日を設定し、個に応じた指導を行った。 ・1年生においては、放課後を利用して「学習会」を開き、基礎学力の向上に努めた。2年生においては、復習に重きを置いて、週ごとに課題を提示した。3年生においては、5教科の週末課題に加えて「質問教室」を開放し、学習に関する質問を受ける場を設定した。	・校内研修会や研究授業、教科の枠を超えた取り組みを共有する場などを設定し、全職員が一丸となってさらなる授業改善に努める。 ・コミュニケーション・トレーニングの効果を高めるため、実施する頻度を検討する。 ・ICT機器をより効果的に活用する。 ・基礎学力が定着するように課題提示の工夫を行う。	未来を切り拓く、という教育目標に沿った改善策である。実際、指導方法や授業の工夫が顕著にみられ、目標値をやや下回っているものの、生徒には先生方の工夫や授業改善に対する熱意が伝わっているものと想像できる。 よって、改善策についても適切な案であり、引き続き創意工夫を継続願いたい。 ROSEタイムは数値以上の効果があると考えている。しかしながら、この好印象好結果にとらわれず、引き続きあらたな取り組みで高みを目指しているのとおりである。 ・「授業が分かりやすく楽しい」は学校の本質的な部分であり、目標の達成に向けて日々努めできたことが伺えて良かった。 ・「先生は、教え方にいろいろ工夫している」は目標をやや下回っているが、元々の目標が高いと思うので次年度も引き続き高みを維持していきたい。 ・教え合い学習の94.6%は荒牧中学校の校風にあった取り組みで良かったと思う。 ・一方でコミトレについては評価にしろい部分があるのではないかと、より具体的な目標設定が必要ではないかと感じた。
		・My学ノートの内容充実を図るため、学習委員会を通して学年に応じた目標を設定するとともに、何をしたら良いかわからない生徒のためにお手本やルーブリックを提示する。 ・学期ごとに各教科の学習内容と家庭学習の方法をプリントにして配布する(シラバス)。 ・長期休業などの課題は、計画を立てられるようになりやすく示す。 ・生徒、保護者ともに宿題が分かるように連絡帳の記入を徹底させる(朝読書や終礼学習などの時間を確保して連絡帳チェックの時間にする) ・プリントや持ち物の管理が難しい生徒も多いので、まずは家で勉強する道具を整えるところから、授業で教えていく。特に1年生は、復習する習慣を付ける以前に授業起立が身につけていない生徒も多いので、まずはルールを徹底させる。 ・振り返りの一つとして宿題を授業の最後で少し行ったタブレットで配布するなどの工夫を行う。 ・振り返りシートに何を書いて良いのかわからない生徒も居るので、個別に声を掛け、スモールステップで少しずつ自分で書けるようになる。 ・週末課題の提出日が月曜に偏るので、教科で提出日をずらす。 ・教科ごとのもまとめレポートなどは、個々の能力に応じた課題などの工夫をする。	・毎日の家庭学習の時間が1時間以上の生徒を6.5%に増加させる。 ・課題を提出している生徒を80%以上にする。		・学校の授業時間以外の勉強時間1時間以上の生徒が57.0%と、前年(60.1%)より3%減少した。一昨年度の57.4%とほぼ同じで、家庭学習の習慣が身につけている生徒が増えない傾向である。学年別で見ると、1年生が38.0% (前年57.6%) で19.6%減少、2年生が53.2% (前年40.4%) で13.2%増加、3年生が80.2% (前年80.2%) で横ばいの状況となっており、1年生の学習習慣が大きな課題である。 ・「全くしない」と回答した生徒が11.2%と、前年(12.1%)よりも1.1%減少している「全くしていない」生徒が減少している中で、学習しようという意欲を持つ生徒は増加していると考えられる。また、「2時間以上」学習している生徒は21.5% (昨年度25.4%) と減少しているが、「1時間以上2時間未満」の生徒は35.5% (昨年度34.7%) と微増している中で、これらの生徒たちを「2時間以上」の学習にどう取り組ませるかが課題である。	・1年生は、まず持ち物がそろわないので、家に帰ってから連絡帳の確認をするところから習慣付けが必要である。そのためには、終礼でしっかり連絡帳を書かなければならない。次に、連絡帳を朝確認して宿題ができていないまま登校する生徒も多いので、連絡帳を帰宅後すぐに確認して宿題に取り組ませることが重要である。 ・2年生の学習習慣への対策としては、1年生の頃から進路学習を行い、2年生で中だるみしないよう、進路への目標意識を持たせる。 ・スクールタクトやミライシードなどを活用する。 ・よくできたときは褒めてやる気を伸ばす。 ・学習する環境づくり(机の整頓など)も意識させる。 ・何をしたらいいのかわからない生徒も多いので、マイ学やノートの良い例などを示し、取り組みやすい環境を整える。 ・一気に課題を出すだけでなく、日々少しずつ取り組める課題を工夫する	家庭学習の充実、一長一短では改善できないと考えている。これまでもいろいろな工夫や仕掛けをしても大きな効果も得られていない。先生方の改善策で効果がないのであれば、生徒たち、子どもたちという考えがあるか聞いてみてほしいのではないかと。 ・家庭学習は、昔からの課題であり単年度の評価では難しく思う。 ・1年生の習慣づけが必要については、全くその通りで予習復習の大切さを繰り返し指導いただきたい。 ・そもそも家庭の学習環境が難しいのではないかと、個々に合った指導をお願いしたい。
		・読書活動の習慣化、定着化を図る。 ・読書活動を充実させ、読書力の獲得を図る。	・月・水・金の朝と昼休みに開館する ・年度末に貸出冊数の多かった生徒を表彰する ・年度当初、国語科の授業で全クラスに図書館の利用指導を行う ・読書の記録「ARA図書館帳」で読書の習慣化を目指す ・朝読書は、図書室で借りた本を読む ・新聞の開業・学級図書を増加 ・校外学習や職業調べ、修学旅行用の資料をさらに充実させ、総合的な学習の時間等でも図書館を利用する ・「図書館だより」に「先生のイチオシ」など生徒が身近に感じられるコーナーを設ける ・「図書館だより」「学校だより」「ホームページ」で学校での読書活動の取り組みを紹介し、家庭での読書習慣に繋げる ・NIEワークシートを開業、配布 ・生徒、教師のアンケートによる蔵書選定 ・学習委員会の図書通番(貸出手続き)の実施 ・特別支援学級生徒の「自立活動」として、廃棄本の廃棄処理や「ARA図書館帳」などの作成 ・学習委員、司書、司書教諭、ボランティアによる「図書館まつり」を行う	・年間貸出12,000冊 ・アンケート「学校は読書を力を入れている」70%以上を目指す ・保護者アンケート「読書に親しむ機会を設けている」70%以上を目指す	B	・年間貸出15392冊(1月末時点、朝読書学級文庫も含む)。目標は達成したが、昨年度より少ない結果となった。 ・トライやる・ウィークの調べ学習等、学年の行事に関しても図書館の蔵書を活用しているが、貸し出しているタブレットの利用等で図書の貸し出しは減少傾向にある。 ・月・水・金の開館には10人程度の来館がある。本を借りに来る生徒が大半で、読むだけの生徒は少ない。 ・生徒アンケート「学校は読書を力を入れている」について、肯定的に回答した割合は57.8%と、目標より低い値となった。 ・保護者アンケート「学校は積極的に読書に親しむ機会を設けている」について、肯定的に回答した割合は88.3%となり、目標を若干下回る結果となった。家で本を読む習慣がなく、図書室で借りた本を持って帰ってきたのを見たことがないと回答もあった。タブレットやスマートフォンの利用が影響しているのでは、との回答もあった。 ・蔵書の内容について、マンガの割合が多くなり、文学作品に触れている割合が少なくなっているとの声がある。 ・今年度の図書館まつりは「理科」を題材に、読書との関連から興味を持てるよう取り組んだ。校内の科学部や理科の教職員の協力もあり、図書室利用の機会を生み出すことができた。 ・朝読書の時間で読書に親しんでいる様子があまり見られないの声があった。教師アンケートにて、「朝読書の時間の充実」に努めている」に肯定的に回答したのは70.2%で、昨年度の60.1%より増加しているが、本年度から実施している「伊丹市子ども電子図書館」や、その他テスト前学習やコミトレ等の時間に充てている現状もあり、紙の本での読書に親しむ機会が少なくなっているとの声もある。 ・子どもたちが持つ読書のニーズに今の図書室が応えられているのかどうか検討する必要がある。 ・読書活動の充実のために、各学年国語科にて夏期休暇・冬期休暇前に図書室で授業を行い、貸出を実施した。貸出冊数の増加につながったと考えられる。 ・学習委員の貸出手続き作業については、意欲的な学習委員が取り組むのが大半で、当番にあたる生徒全員が取り組めているとは、現状言えない。 ・毎月発行の図書館だよりにて、開館日や蔵書の紹介等を継続的に行っている。	・学習委員の取り組みの現状として、My学や学習環境についての取り組みが多く、図書に関する仕事ができている。図書委員会の新設が最も望ましいが、毎月の専門委員会や学習と図書の両方について課題とするよう、環境整備をしていく必要がある。 ・朝読書で読む本について、各自が図書室で借りた本を読んでも、推奨していく必要がある。また、学級図書として貸し出す本についても、種類を増やしていく。 ・蔵書のニーズに応えるべく、スクールタクトやGoogle Formsを用いてアンケートを実施していく。
豊かな心・健やかな体	不登校への対応	・週1回の不登校係会で現在の状況や取り組みの情報交換を行い、個々の生徒や保護者への対応を検討・検証し、学年会との連携をはかる。 ・養護教諭と連携し、情報共有をはかる。 ・別室や地域の方との連携をはかり、教室や学校に入りくい生徒の居場所づくりに努める。 ・教室復帰に向けて、別室と学年との情報共有を密にする。 ・関係機関や小学校との連携を深める。 ・特別支援の視点を取り入れて指導やサポートを行う。 ・教育相談の機会を学期ごとに確保し、生徒の声に耳を傾ける。 ・連絡帳等でのやりとりを活用し、個々の生徒の状況を把握する。	・生徒アンケートにおいて「学校に行くのが楽しい」と回答する生徒の割合を80%以上にする。 ・「先生は生徒の悩みや不安に親身になって相談にのってくれる。」を85%以上にする	A	・「学校に行くのが楽しい」と回答した生徒の割合は80%で、昨年より減少したが、無回答率が上がっているため単純に比較できない。 ・「先生は生徒の悩みや不安に親身になって相談にのってくれる」と回答した生徒の割合は85.6%で昨年同様に高いポイントを維持しているが、否定的な回答が減っているのを改善していきたいと考える。 ・別室が昨年引き続き機能し、教室に行けない生徒の居場所となる事例が増えた。 ・関係機関やSSWと連携し、ミニケース会議を開いて支援方法を共有した結果、別室登校できるようになった事例も見られた。 ・養護教諭や人権課題加配教員をはじめ、さまざまな職員が別室生徒や不登校傾向生徒と関わることができた。 ・特別支援コーディネーターとも連携し、通級指導など、個々の生徒の状況に応じてサポートできた。 ・「ほっこり広場」の利用回数が減った。	・不登校支援員としっかりと連携しながら別室運営している。 ・関係機関やSC・SSWとの連携を深め、職員間での情報共有を進める。 ・引き続き多くの教職員で生徒に関わり、サポートやケアリングに努める。 ・特別支援教育の面からの個別のサポートをさらに充実させていく。 ・地域の人材活用を進める。	学校に來れない子、行き着く子について子どもたちはどう思っているか？子どもの多くにもよるサポートで子ども同士で解決できないか。 学校や子どもにとって安心安全な場所になっているか。子どもに聞いてほしい。職員室や会議室は子どもにとってどういう場所か？入っては行けない場所になっていないか？ 自己評価A についてはこの結果に甘んじたくない。さらなる高みを目指してほしい。また、その根拠、理由についても考え反省点、工夫はないか追及してほしい。「学校に行くのが楽しい」が80%であるのは評価してよいと思う。 ・きめ細かい取り組みを感じる事が出来る。別室など居場所を作っただけでなく感謝する。 ・最近の個を大切にすることで、無理をさせない社会は不登校が増えるのは当然と思う。学校現場の苦労は計り知れないが、そのような状況で「A」は素晴らしい。
		・生徒指導係会を定期的に開催し、情報交換を密に行うとともに、係会の確認事項を学校・学年での共通理解事項とする。 ・職員間で連携を図り、全職員が同一歩調で生徒指導を行う。 ・報告・連絡・相談体制を整え、生徒指導事案の情報共有を図る。 ・関係機関やSSW、SCと連携して生徒指導に取り組む。 ・問題行動が起こったときだけでなく、普段からきめ細かく対応し、生徒理解に努める。 ・生徒会と連携し、校則について見直しを行う。 ・配慮が必要な生徒は、保護者と連携し、個別・別室対応を行う。	・保護者、生徒アンケートにおいて「学校は適切に生徒指導をしている」と回答する割合を80%以上にする。 ・教職員アンケートにおいて「組織的に対応できる体制が整っている」と回答する割合を90%以上にする。	B	・「学校は適切に生徒指導している」と回答している割合は、生徒89.0%、保護者86.1%と目標を達成することができなかったが保護者の割合が3.1%上がった。 ・教職員アンケートにおいて「組織的に対応できる体制が整っている」と回答する割合が83.9%と目標には届かなかったが、昨年の81.3%から2.6%上がった。 ・関係機関やSSW、SCと連携して生徒指導に取り組むことはでき、校則の見直しも行うことができた。	・生徒指導事案の情報共有をより一層図るとともに、家庭訪問や教育相談を通じて、普段から丁寧かつきめ細かに対応に努める。 ・特別支援教育の面からのサポートもさらに強化していく。 ・指導後も適宜声かけをするなど、ケアに努める。 ・生徒指導係会で情報共有したことを学年内や学年相互で共有し、報告・連絡・相談体制を強化する。 ・関係機関やSSW、SCとの連携を今後も継続して進めていく。 ・生徒会とも協力し、校則やルールの改善を進めていく。	適切な指導、きめ細かい対応については、個人の価値観やそれぞれの思いや考えで変わらと思う。対応後の振り返りや感想、どう思ったか、どんな気持ちだったかななどの情報を共有してほしい。 ・「組織的に対応できる体制が整っている」が向上し、生徒会と協力して校則やルールの改善が出来たのは良かった。 ・今年度は、問題行動も多く聞いたので対応に苦慮されたと思う。何が適切なのか、その時に正しく判断することは難しいが、個人に負担が偏らぬようにチームとして連携しながら学校全体で取り組んでいた。
		・いじめの未然防止、早期対応に取り組む。	・いじめアンケートを実施し早期発見に努めるとともに、連絡帳の活用など、普段の生活より入念な生徒観察を行い、心寄り添う指導を心がける。 ・生徒や保護者の訴えやアンケートをもとに教育相談を行い、早期対応に取り組む。 ・いじめ事案については、担任一人で抱え込まないよう、に、報告・連絡・相談体制を整え、学年や学校で連携し、継続した指導や見守りを行う。 ・QUアンケート等を活用し、いじめの未然防止に努めるとともに、いじめの芽を摘む。 ・生徒指導講演会を実施するなど、SNSのいじめへの啓発活動を行う。 ・SNSの使い方について周知する。	・いじめアンケートにおいて、「いじめられていると感じる」生徒を0%にする ・「学校へ行くのが楽しい」と回答している生徒を80%以上にする。 ・「先生は相談にのってくれる」と感じる生徒を85%以上にする。	B	・いじめアンケート、教育相談を実施し、いじめの実態把握と未然防止に努めた。 ・いじめアンケートの結果「いじめられていると感じる」生徒が0%にはならなかった。 ・「学校へ行くのが楽しい」と回答した生徒が80.0%と減少したが、目標を達成することができた。 ・「先生は相談にのってくれる」と感じる生徒が85.6%と増加し、目標を達成することができた。 ・関係機関やSSW、SCと連携して、いじめへの対応に取り組むことができた。 ・SNSに関する講演会を行い、情報モラルの向上に努めた。 ・心と体のアンケートを学年で管理し、生徒の心の動きを学年で共有できる方法を増やした。	・いじめアンケートを定期的に実施し、その結果を学年間で共有することで、組織的かつ迅速な対応に努める。 ・教育相談後も生徒観察や見守り活動を行い、生徒のケアに努める。 ・学校が安心、安全で心の居場所となるように、担任だけでなく、学年として学級経営を行い、クラスの雰囲気を見守る。 ・報告・連絡・相談体制を進め、学年で連携して生徒理解に努める。 ・関係機関やSSW、SCとの連携を今後も継続して進めていく。
道徳教育の充実	・「心の教育」を推進する。	・道徳授業において生徒一人ひとりの考えや思いを見取れるような、中心発問・授業展開を行えるよう、研究と研修を行う。 ・さまざまな教員から道徳の授業を受けることで、多様な角度からアプローチを受け、より豊かな心を育む機会をもつ。 ・三者懇談など保護者と対面するときに、話題として道徳ノートなどを提示し、学習状況の共有を行う。 ・道徳の授業を中心にすべての教育活動を通じて、命の大切さ、相手を思いやる心を育む。 ・一ヶ月の指導案を学年会で提案するなどし、指導案の質の向上や教職員の内容理解を促す。 ・教科書の教材を効果的に活用して道徳授業を行う。 ・1つの教材を全学年で行い、指導力向上や意見交流がしやすい雰囲気の醸成を図る。	「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらった」の割合を各学年85%以上にする。	B	・「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらった」の割合が全学年90%を超えた。 ・全体道徳に向けて、指導案検討の機会を持つことができた。 ・保護者アンケートにおいて、「学校が思いやりについて教えている」項目の割合が低かった。 ・保護者に道徳の授業をみてもらう機会がなかった。 ・道徳の指導について話し合う機会がまだ少ない。	・夏の研修などしっかりと時間が取れるタイミングで、指導案作成・検討の機会を持ち、全教職員が自信を持って授業に向かえるようにする。 ・保護者に道徳の授業を見てももらえるよう、参観日の設定をする。	ROSEタイムで道徳をしようか？ 先生、子どもも含めて、人権、ダイバーシティ、インクルージョンの意味を理解し荒中独自の先進的な道徳教育を検討してほしい。 ・道徳が教科化されて、日が浅く保護者のアンケートが低いのはよくわかる。学校だより等で、授業の様子を知らせるなど伝える機会を増やしてはどうでしょうか。 ・道徳は内面にかかわることで、客観的な評価が難しいと思う。教師によって指導に差が出ないように取り組んでほしい。
		・体育の授業を通して、体力の向上を図るとともに自己の健康面に対する意識を高める指導を行う。 ・部活動では競技力、体力の向上に努める。 ・教師からの説明を分かりやすく簡潔にまとめ、活動時間を増やす。	・スポーツテストバッジ受賞者は3年生37%、2年生27%、1年生12%を目指す。 ・保健だよりについては、熱中症やインフルエンザなどの主要なものについてもHPに掲載し、より細かい情報を発信する。	B	・スポーツテストバッジ受賞者は、3年生が52%、2年生が37%、1年生が11%で目標は2年生と3年生は達成することができた。また、体力向上に関するアンケートに対して、生徒は95.4%と肯定的な意見を回答し、保護者からも90.7%が肯定的な回答を得られている。さらに、保健だよりも定期的に発行したことが、生徒の健康や体力向上につながった。	体力に関するアンケートについて、今年度の肯定的な生徒の回答は88.0%(前年度の94.3%)より下回った。近年、部活動時間が減少しているため、昼休みや球技大会を利用し、生徒の活動時間を確保する。また、前年度に引き続き、スポーツテストのランキングの作成や目標設定などを通して、スポーツテストへのモチベーションを上げて体力の向上を図りたい。また低体力の生徒に配慮しながら授業中で体力が向上するような活動を増やす。	体力向上は、重点項目にもあるとおり、自ら進んで行う必要がある。毎日の行動により、姿勢や睡眠にも影響し規則正しい生活の一環を担う。日々の体力向上施策、自ら進んで運動する仕掛けづくりをお願いしたい。定期的に保険だよりを発行出来て良かった。コロナ禍が過ぎてもインフルエンザなど病気が続いているので、注意喚起なども含めて続けていきたい。 ・部活動時間の低下が、体力の低下につながらないように生徒が自ら目標を設定し、クリアしていくような経験を増やしてほしい。
		・自ら進んで体力を向上させようとする生徒を育てる。	・オーブンスクール週間や、授業参観を実施し保護者や地域の意見を学校運営に活かす。 ・学校だよりを発行し地域にも配布する。 ・学校ホームページの更新やGoogleClassroomの配信を積極的に行う。 ・保健だよりなどを通して、健康管理の啓発を行う。 ・アンケート結果や保護者の意見を考慮し改善する。 ・GoogleClassroomのメール登録家庭数増加をめざすため、案内プリントを作成し配付する。	保護者アンケートにおいて、「学校の情報を学校だよりやホームページ、GoogleClassroomを通じて保護者に伝えられている」と回答した保護者の割合を90%以上とする。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は、学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合が90%以上とする。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した保護者の割合が90%以上とする。 ・GoogleClassroomのメール登録家庭数の割合を全家庭の50%以上とする。	B	・保護者アンケートにおいて、「学校の情報を学校だよりやホームページ、GoogleClassroomを通じて保護者に伝えられている」と回答した保護者の割合は85.6%となっており、目標値には4.4%達しなかった。 ・保護者アンケートにおいて、「学校の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合は84.7%となっており、目標を達成した。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した保護者の割合は84.1%となっており、目標を達成した。 上記3項目において、概ね良好な数値となっているものの、直近3年間の経年変化では、どれも徐々に数値が下がってきているので、学校情報を積極的に発信していく必要がある。	・ホームページや学校だよりを通じて、年間行事予定や月間行事予定、学校行事の様子などを定期的に更新・発行し、積極的な学校情報の発信に努める。 ・新年度はGoogleClassroomではなく、まなびポケットを運用して情報発信をすることになるので、保護者に対してまなびポケットのアプリのダウンロードやログイン、使用方法などを周知する

教育目標		自ら考え、行動し、未来を創造できる生徒の育成 ～感謝する心、確かな学力、健やかな心身を育てる～					
重点目標		①確かな学力の育成 ②豊かな心・健康な体の育成 ③開かれた信頼される学校づくり					
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学校関係者評価総括 ★・目標と結果の数値にとらわれることなく、引き続き工夫をお願いしたい。自己評価はBが多いが、時には厳しく、成果があったものについては評価を上げるなど、メリハリをつけた評価をお願いしたい。★・全体として自己評価はAが一つであったが、逆にCはゼロときめ細かい対策で改善に努められたと思う。・多様な生徒に対応している話を聞くと、今の学校の難しさを感じるが関係者で協力しながら取り組んでいただきたい。 ★・「学力の向上」では、全国学力調査で、粘り強く取り組む生徒は全国、兵庫、伊丹と比較しても多いが、学力面では、基礎学力の定着の乏しさや、家庭学習習慣のついていない影響が、顕著にあらわれている。3年生の実力テストなど、全国の中でのレベルや市内校との比較をみていると、つけるべき力の定着に尽力していただきたいと考える。子どもの「学校へ行くのが楽しい」、「授業はわかりやすく楽しい」では、年々成果が上がっている。 ・「家庭学習の時間」についての課題はなかなか取り組みからの成果が出ていないように思える。学習に対する姿勢は、学校だけでは変えられないので、家庭教育力を向上するための呼びかけ等をPTA活動を通してアナウンスしていきたい。							
次年度に向けた重点的な改善点 令和4年度から学校教育目標を、社会の変化に「自ら考え、行動し」、しなやかに対応できる力を「未来を創造する力」と捉え、授業力向上と生徒指導指針についても、学校教育目標の実現を目指した目標とした。授業に居場所のある、わかる授業、参加できる授業こそが、最大の生徒指導とし、授業を通して、子どもたちの自己肯定感、自己有用感をもたせる仕組みを授業の中につくる土台を研究担当者会を柱に試行錯誤してきた。『教え合い学習』のスタイルを軸に、今まで継続してきた、QUやCRTを有効に活用できるよう生徒の実態を把握して授業づくりを進められるよう工夫している。これまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善・工夫を目指すか、「めあての明示」「振り返り活動」「教え合い学習」等を引き続き徹底し、子どもたちの知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育てていく「授業づくり」の構築が必要である。また、生徒指導面の大きな課題である不登校問題では、関係機関との効率的な連携を行うために、教職員の共通理解のもと、足並みを揃えた実践を進めていく必要がある。人権教育では、加配教員がついて事をきっかけに、全校道徳授業を通して「個々の実態に応じ、子どもの権利を尊重した指導の充実」に全職員が取り組んだ。今後も子どもひとりひとりの居場所が学校にあり、安心して過ごせるよう人権課題に根ざした集団づくりと社会に現存する課題に向き合った取り組みを継続する必要がある。そして、『自他の命と人権を尊重できる生徒を育てる』教育活動を軸に、生徒、職員、家庭、地域、関係機関と連携し、ともに成長していける学校運営を管理職が中心となって、実践していく。							

自己評価の基準 **A**：目標を上回った **B**：目標どおりに達成できた **C**：目標をやや下回った **D**：目標を大きく下回った